

高山寺本古往来に見える漢語

山 田 俊 雄

「高山寺遺文抄」に堀池・田中両氏によつてほぼ全貌を紹介された、いはゆる書札礼は表白集の紙背に存するもので、往来の一種である。書札礼の名称のしかるべからざる事は識者の一致した見解である。また高山寺に在る原本の箱書に願文集とするのも、名実伴はぬ称であるから、本稿では、すべて古往来と称することとする。右に述べた「高山寺遺文抄」の翻刻は、微細な視点に立つて見ると、原本の姿そのまゝといふには遠く、国語学上の資料としては、不十分の憾がある。吉田金彦氏が、その篤学の志をもつて活字翻刻せられたものも、活版の制約如何ともなしたがたき故か、私の見るところでは、なほ満たされざるものを含む。

私は、原本についての昭和三十八年五月十六日の自己の調査を基調にして、以下、原本にとつてはむしろ部分的といふべき聊かの考察を公表する。原本の披見については小川義章先生の御厚誼に預り、解説については、前記二種の翻刻を参

考にすることができた。この点に関して先進の方々に深甚の謝意を表はすものである。なほ早くから本書の存在についての知見を恵まれた築島裕氏に対しても、此の機会に厚く感謝する。

ここに高山寺古往来の漢語について卑見を述べるには、二つの目標がある。一つは、年来本文批判の対象にしてゐる、三卷本色葉字類抄に見える音読の置字の性格を探索する方便を求めることであり、他は、ひろく中世の漢字・漢語を調査する基点を定めたことである。この古往来の成立・書写の年代について、或は平安末期といひ、或は鎌倉初期といふが、その絶対年代をはつきり確定することは現段階では不可能に近からう。しかしその点の障碍に拘らずこれを、中世初頭の書簡用語の一資料と目しても、方法的に過誤を犯すことにはなるまい。吉田氏のいはれるやうに三卷本色葉字類抄の記録するところと、相似た現象を含むと見ることができると

仮定して、私の場合、成立年代・書写年代の追求を一往措いても差支へは少いものと考へられる。本書を紙背にもつ表白集は、その中に保延などの年号をもつて作られたと覚しき文をふくんで居り、表白、教化の文章そのものも別途に考究すべき好資料であるが、それと、表裏一体の本書の成立および書写は、本書の側の内部徴証のみでは決しがたいことと考へられ、私は後考の機を持ちたいと思ふ。

さて、本書に見える漢語は、そのすべてを列挙する時は、かなりの量に上る。尺牘の数にして長短五十六篇、原本の行数にして四百三十九行、一行十四五六字に及ぶ全文を掲げてもさしたるものではないが、語を列挙するに當つても、一々の所在や本文のありさまを巨細に示すことは、本稿のよくするところでない。なほ、原文では「飢渴」と「飢謁」とする如き例や、「府望」の「府フシテ望シ」の如き、字類抄に照すると倭訓と見えるものもあり、他には補入・顛倒の例なきにしもあらず、これらは却つて原文の解説について改めて論及すべき処であるので、それらは別に適宜の機会を得た折に公表するとして、ここでは内容紹介の大概に終始する事を諒とせられたい。以下に示す挙例は原本に於ける所見のすべてを網羅することを目指したものであるが、ここでは一々の場所を示さない。

さて、この往來に見える漢語、ことに明らかに音読に従つたであらうと思はれるものを中心にして報告するが、三卷本字類抄におけるそれとの対照を試みつゝ、その性格を把握し

よう。

三卷本字類抄の漢語については、私に別に粗雑ながら一つの整理を与へたものがあるので、それとの対照の結果、共通するものについては*印をつけて示す。またサ行変格活用動詞化の「ス」語尾を伴つて活用したのものには、その語の下に（ス）の標示を与へた。一字の漢語の場合の動詞化したものは、字類抄に動詞化した形で登録あるものに限つて*を付けた。二字の漢語についてはその点を区別すべき余地がないので、字面の一致するものに*を与へた。排列は、上位字の、字音のかな表記の五十音順を基準とし、その下位の排列には必ずしも一定の基準を与へず、字類抄の側について私が旧稿で執つた標準を踏襲した。なほ字類抄との対照は、主としてその暈字門との間に行つたが、それ以外の門における所見と一致する場合も示した。「々」をふくむものは重点門に見え

る。
先づ、一字の漢語について報告する。

カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ

案(ス) *
郷(ス)
勘(ス)
寒(ス)
期(ス)
菊*
京*
居(ス)

禁 (ス) *
 愚 (ス) *
 供 (ス) *
 決 (ス) *
 郡 (ス) *
 啓 (ス) *
 繼 (ス) *
 交 (ス) *
 業 (ス) *
 候 (ス) *
 故 (ス) *
 期 (ス) *
 期 (ス) *
 坐 (ス) *
 才 (ス) *
 察 (ス) *
 散 (ス) *
 算 (ス) *
 参 (ス) *
 食 (ス) *
 實 (ス) *
 執 (ス) *
 謝 (ス) *
 状 (ス) *

衆 (ス) *
 術 (ス) *
 暑 (ス) *
 處 (ス) *
 證 (ス) *
 稱 (ス) *
 職 (ス) *
 推 (ス) *
 切 (ス) *
 節 (ス) *
 僧 (ス) *
 孫 (ス) *
 損 (ス) *
 存 (ス) *
 他 (ス) *
 馱 (ス) *
 端 (ス) *
 忠 (ス) *
 定 (ス) *
 躰 (ス) *
 泥 (ス) *
 土 (ス) *
 頭 (ス) *

通 (ス) *
 藤 (ス) *
 同 (ス) *
 難 (ス) *
 二 (ス) *
 廿 (ス) *
 房 (ス) *
 美 (ス) *
 便 (ス) *
 封 (ス) *
 憤 (ス) *
 伏 (ス) *
 表 (ス) *
 弁 (ス) *
 變 (ス) *
 邊 (ス) *
 芥 (ス) *

名 (ス) *
 万 (ス) *
 命 (ス) *
 面 (ス) *
 役 (ス) *
 約 (ス) *
 餘 (ス) *
 用 (ス) *
 類 (ス) *
 例 (ス) *
 陵 (ス) *
 料 (ス) *
 論 (ス) *
 位 (ス) *
 會 (ス) *
 恩 (ス) *

右のうち動詞化して用ゐるもの、字類抄に於いて、十三例の共通するを見る。その他のものでは、二十九例に及ぶ。次に二字以上の漢語では、

哀 — 憐 *
 惡 — 業 *
 納 — 憐 *

エシ エウ エイ ウシ ム ッ ャ イシ イッ イウ イイ アシ アラ

獸 延 要 睿 云 運 鬱 右 雨 有 因 隱 引 壹 一 有 遊 優 衣 以 案 押

一領使
 一内(ス)*
 一前 一後
 一食
 一助(ス)
 一宴*
 一若亡*
 一々* 一行 一時 一日 一生 一人* 一刹
 一段 一肘 一文 一定* 一塵 一朝 一倍
 一枚 一兩 一兩月
 一石 一枚
 一撰*
 一居(ス)*
 一縁*
 一靈(驗カ*) 一綾
 一氣
 一方(左)
 一念* 一望*
 一米
 一々*
 一山
 一人
 一引(シ) 一期(シ)* 一筭 一年*
 一却*

カン カラ ガク カク ガウ カウ ガ カ オン

勘 閑 合 學 脚 強 仰 幸 庚 厚 江 更 香 耕 行 高 鵝 雅 呵 苛 恩 煙 塩

一梅*
 一鬱
 一約
 一法*
 一噴*
 一旨*
 一望
 一座 一察 一名
 一步*
 一作*
 一林寺
 一發(シ)*
 一州
 一強 (「字」は「コウ」の字音。カウとあるは不審)
 一申
 一甚
 一望* (「字」は「キヤウハウ」)
 一盜* 一力*
 一力*
 一文
 一夕* 一力*
 一居*
 一當* 一定(シ)

キヤク ギヤウ キヤウ キツ ギウ キウ ギキ キウ キウ *
客 行 京 輕 邊 吉 牛 宮 窮 九 舊 疑 騎 記 起 奇 喜 祈 柑 咸 欠 看 寒 感

—人 —事* —事
—中 —重 —述* —日 —車* —人 —屈* —廻 —懷 —曲 —慮* —用* —錄* —居* (「字」は「キヨ」)
—恠* —悦* —願* —誓 —禱*
—子(色)
—欠 —失 —督(長)
—氣 —悅* —淚 —應

クキ グワン クワン グワツ クワウ クワ クヨウ グ ク キン ギヨ キヨ
貴 頑 縮 官 月 光 荒 菓 興 恐 愚 駢 公 今 近 謹 勤 禁 魚 去 居 隔

—心* (「字」は「カクシム」)
—處* —月* —春 —年*
—網* —倉 —仕(シ)
—啓(キ) —言* —辭*
—々* —親 —代 —邊 —來
—歲 —事* —文(所) (「字」に「公文」)
—使 —官 —身 —僧
—悅* —懼* —々 —欣 —戰* —恥
—惶* —宴* (「字」は「ケウエン」)
—子 —涼* —駕 —臨
—節 —日 —迫*
—米 —物* —紘 —愚*
—下 —緘* (「字」は「貴滅」) —館 —國
—札 —從 —殿 —封 —命 —郎

ケン ケツ ケウ ケイ ゲ ケ グン クエン グニ クキヨウ
 檢 見 結 校 交 教 還 京 刑 競 敬 經 鷄 解 下 懈 希 飢 家 郡 元 眷 外 恐

(御)
 田* 物 縁* 書殿 衆* 書* 遠 都 爵* 馬 白 營* 距* 除* 向 怠* 有* 渴* 用 司 正* 顧* 土* 慄
 田使 解 廻 坐 一人 文
 寒*

サイ サ シン シン シン コロ コロ コロ コロ コ
 才 佐 左 言 今 懇 業 極 國 恒 紅 後 伍 窟 後 御 五 巨 現 減 嚴 犬 献

能 龍伯三 右* 上* 月 誠 障 幸* 幸* 例* 葉* 宴* 把 徠* 世* 定 要 簡日 多* 當 欠 寒 産 上
 一近 一方 一世 一朝 一日 一年* 一明 一夜
 一宣 一前 一内 一分寺
 一梅(色)
 一(「字」は「コエン」) 一從 一信
 一服 一用 一覽 一靈會*
 一齋 一書 一障 一酒 一前 一從
 一禁 一石 一節 一駄 一枚
 一教 一命

シ サラ サラ サウ ザイ

支子詩 參山三雜昨作造雙早在罪稅西菜蔡裁再妻 最

縁 (「所縁」たるべきか。所と取との混同) 紙 初* 子* 拜* 免 倫* 料 國 所 過* 俗 參* 六* 酒 (司) 田 文 日 物 箇日 一月 一斤 一石 一疋 一百束 上 一 謁 下 一 候 一 集 一 拾葉 登 一 入* 一 拜* 一 府 一 來 歌 一 孫* 細* 度*

ジャウ シヤウ シヤ ウラ ジツ ショ ショ

上姓壯聖裝將生舎拾 十實日宿數事慈時自自試死紙師

縁 一 壇* (「字」は「師檀」) 紙 一 上 去 樂* 然* 參 一 用 節* 慈 一 縁 顔 年 願 一 業 一 物 月* 正 一 否* 九日 一 五日 一 段 一 八日 一 枚 一 余 卷 一 烈 拾 一 疋 弟 涯* 一 立(?) 將 一 軍 一 束* 一 教* 一 男(?) 姓 一 名 一 下* 一 啓* 一 道 一 中 一 分 一 品

シン ショウ シン ショウ ショウ ショウ ショウ ショウ ショウ ショウ
 心 乘 縱 悚 承 勝 叙 處 諸 書 所 春 駿 出 從 數 収 殊 手 種 借 成 常
 一 肝* 一 馬 一 容* 一 悅 一 先 一 負* 一 位* 一 分* 一 郡(一 群) 一 生 一 納 一 秋* 一 身* 一 者 一 十 一 勝* 一 光(?) 一 納使(「字」に「収納」) 一 勝* 一 々々(「字」は「シウシウ」) 一 書* 一 就* 一 途 一 馬
 一 事* 一 神* 一 情* 一 諾* (「字」は「ジヨウダク」) 一 劣* 一 犯 一 望* 一 為 一 來 一 俊馬(「字」に「俊馬」) 一 馬 一 一 馬 一 一 戰 一 一 佛 一 一 人 一 一 佛

セウ セイ セ ズイ スイ ス ジン
 小 道 少 生 制 歲 誠 星 世 政 世 從(?) 隨 推 水 數 人 身 眞 進 新 親 神
 一 緣 一 遙* 一 事 一 前 一 止* 一 月* 一 恐* 一 霜* 一 路* 一 理* 一 間* 一 兵 一 身* 一 鳥 一 早 一 日 一 事 一 命 一 偽* 一 上 一 開 一 昵* 一 拜
 (御) 一 々 一 僧 一 田 一 惶* 一 俗* 一 察* 一 量* 一 旱(「字」に「水旱不損」) 一 年 一 力 一 力 一 力 一 年 一 聲 一 年* 一 正 一 火* 一 草

タイ タ シ ソ ソ セン セツ セキ

大 太 他 多 寸 損 足 俗 息 束 忖 僧 [為] 禪 前 懺 撰 專 千 先 殺 寂

鉦 一 皇太后宮 一 師 一 事 一 刀 一 文 一 螺
 (御) 一 行 一 事 一 人 一 聞
 一 少 * 一 々 一 年
 一 断 (ミ) 一 益 * 一 失 (ミ)
 一 下 一 姓 一 利 * 一 把 一 々 * 一 家 *
 一 把 一 々 * 一 家 *
 一 術 * (「字」、セの部に収め、センとよむ。
 これは実には字音にあらず)
 一 後 一 司 一 生
 一 心 一 定 (ミ)
 一 輒 * 一 行 一 廻 一 束 一 年
 一 日 * 一 年 * 一 害 * (ミ) 一 生 *
 一 冥

タイ ア チン チヨウ チキウ チウ デ ギ ヲウ

鵜 丁 弟 塵 嘲 停 稠 畫 中 除 治 恥 馳 遲 道 稻 鎰 到 桃 當 第 怠 代 對

一 潤 一 寧 * 一 子 一 垢 一 咲 一 止 * 一 人 * 一 夜 * 一 將 一 堂 一 府 生
 一 目 * 一 術 * 一 辱 * 一 參 (ミ) 一 上 一 早 一 參 * 一 々
 一 心 * 一 理 * 一 米 一 飯 一 來 * 一 花 一 國 一 郡 一 時 * 一 年 * 一 用
 一 五 一 一 一 棹 (「字」は「根」とあり) 一 面 *

ネ シ ニ ナ ナイ ト ト ド ト ヲ ト シ テウ

年 任 人 入 日 廿 貳 二 納 内 頤 讀 同 動 東 同 度 途 土 殿 典 天 逃 朝

一 夕 *
一 亡 * (「字」は「逃亡」)
一 運 一 幸
一 侍
一 上
一 浪
一 中 *
一 々 *
一 刹 一 等 *
一 州
一 靜 *
一 心 * 一 道 *
一 經 *
一 首 *
一 外 *
一 受
一 具 一 月 一 種 一 世 一 町 一 疋
一 拾 伍 斛 一 拾 疋
一 日
一 記
一 部 *
一 情
一 終
一 々 * 一 來 *

ビ ヒ バン ハン バツ ハチ ハク バウ ハウ ハイ バ ノウ

美 誹 紕 被 疲 肥 披 非 晚 万 判 繁 班 末 發 八 薄 白 亡 傍 芳 拜 馬 農

一 料
一 融 一 蹄
一 謁 * 一 見 一 謝 * 一 領 *
一 札 *
一 倫
一 弊 *
一 衣 一 中 一 米 一 露
一 美
一 丈 一 疋 一 木 *
一 向
一 坐 * (「字」は「末座」)
一 給 *
一 多
一 官 代
一 事 一 懷 *
一 景 *
一 常 * 一 違
一 封 一 露 *
一 滿 * (ろ)
一 極 一 瘦
一 物
一 繆 *
一 謗 *
一 操 *

返 別 妙 斃 弊 紛 佛 拂 腹 服 部 武 无 風 不 便 貧 百 兵 必 微
 (御)

抄 當 曲 損 宅* 官 散 神 曉* 心 仕* 内 藝* 頼* 氣 便* 足* 意* 宜* 弊* 姓 船 定* 志 抄 當 曲 損 宅* 官 散 神 曉* 心 仕* 内 藝* 頼* 氣 便* 足* 意* 宜* 弊* 姓 船 定* 志 抄 當 曲 損 宅* 官 散 神 曉* 心 仕* 内 藝* 頼* 氣 便* 足* 意* 宜* 弊* 姓 船 定* 志

蒙 面 酪 名 明 武 无 民 明 蜜 万 煩 犯 奔 本 法 乏 牧 某 奉 補 弁

怙 調* 酌* 分 時 者 是「無益」 煙「字」は「民烟」 後日 一春 一朝* 一年* 夫 衆 一歳 一人 惱* 人 波* 意* 一懷* 文* 少* 宰 甲 配 一君 一公* 一仕* 一借* 一拜 一配 一向 一人* 濟「字」は「辨濟」 綴*「字」は「ホテテ」 一調 一君 一公* 一仕* 一借* 一拜

目 文 門 聞 野 夜 約 遣 餘 用 來 老 流 兩 領 旅 遼 臨 悵 例 練 虛

代* 契* 下 外 法 草 望* 用 月 束* 日 恩 郡 三 一 人 意* 盡* 途* 月* 坐 集 會* 〔字〕 は「ライクワイ」 尅 親* 年* 毛* 〔字〕は「老 毫」 水* 三 足 一 足 一 足 納 所 遠* 〔字〕は「レウエン」 時 惜* 供 給 進 習* 望

六 月 一 丈 往 生 委 曲* 〔字〕は「キキヨク」 違 約* 為 爵* 圍 基* 榮 爵* 路* 遠 郡 一 路* 恩 祈 誨 願* 裁 札 察 一 悉 章 借 恤 恕* 信 一 問 〔字〕は「オン」

右に見る様に、字類抄所収の語との共通のものが尠くないことが明らかである。

右の表は、印刷の都合によつて、原本の字体を十分に精確に再現してゐないものである。上位字の字音（推定したものをふくむ）の五十音順にしたがつて、その字が上位にある例を列挙するにとどめてあつて、先に字類抄疊字門について報告したものは同列に並べないものである。その字が下位、または語中に位置する場合をも網羅することは、今回の紙面が之を許さなかつたので、全く省略することにした。これについては後日、別の機会で他の主題の下に補ふ心算である。従つて、興味ある現象を一覧することができない結果に終つ

てゐる。一例をあげると、上位に立つことのない字が少くないといふことなどがそれである。上位字に立たず、下位字としてのみ用ゐられるもので、一回二回の使用度のものを殆ど省いて頻出するものだけを拾ふと、

意 不 本 用 一
 悦 感 喜 恐 悚 一
 調 参 拜 奉 面 一
 縁 因 結 師 事 小 一
 下 貴 禪 足 門 一
 啓 謹 上 一
 顧 眷 恩 一
 坐 下 末 來 一
 宰 國 牧 一
 察 高 推 禪 恩 一
 札 貴 禪 芳 恩 一
 仕 勤 服 奉 一
 定 一 勘 撰 禪 必 一
 望 鬱 鵝 仰 野 一
 命 貴 殿 一
 力 強 脚 身 人 合 一
 料 菜 農 一
 懷 舊 本 万 一

などである。これは、偶然でないものを含むものではあるま

いか、字類抄における疊字の場合も「悦」や「調」は、上位字としての例が全く見られない。「啓」は、字類抄で見ると「啓白」一語が上位の場合で、他の七例はすべて下位の場合である。それは「察」の場合も、殆ど同じであつて、このやうな傾向は、偶然でなくして、字類抄疊字門の語が、これら古往來の用語と相似たレベルにあるものであらうことを推測せしめるのである。このやうな方法は、未だ十分に確かな検証の法とはいへないけれども、用字と語の形との関連から、漢語を再検することが、有意味であるべきことを暗示するものと考へられる。